町内の会社紹介します

株式会社 広瀬製作所

所在地 橋 場

取締役社長 広瀬 武氏

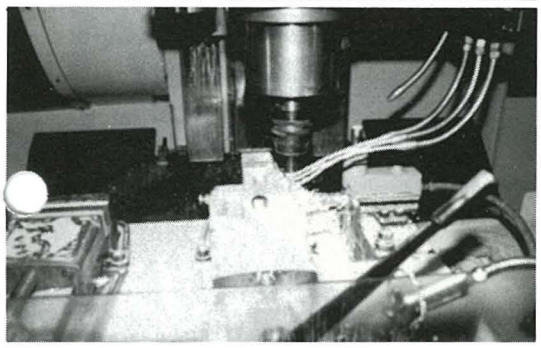
広瀬製作所は主に金型用特殊部品の製造をしている会社です。

材料はステンレス・ダイスコー（ステンレスに熱加工したもの）が主で、ここで作られた部品は成型工場で樹脂などの溶かした物質を金型部へ送り込む際に、その流れを止めたり、開いたりする蛇口（じゃぐち）の役目をするもので、大変精密なものです。現在は、部品製造に高度な技術が要求されるため、最新式ＶＱＣ門型マシニングセンターを導入し、ミクロン単位で作業行程を組みます。

広瀬社長のお話

昭和二十八年に自動車、オートバイ用部品製造工場として父がこの会社を設立したが、昭和五十五年のオイルショックから時代の流れに沿った仕事の選択をしなければならないと思い、現在の金型用部品の製造に切り替えた。一つの部品を完成させるのに何ヵ月もかけることがあり、今は量的なものより質的なものが要求されてきている。これからは年に一つ、新しい物への挑戦をし、実現させていきたいと思う。

▶最新式マシニングセンター



町長ひとりごと ⑯

斉藤 譲

「米百俵」

町内小・中学校の卒業式、入学式が相ついだ。私は、緊張した子供たちを目の前にする度に、胸に熱いものが込みあげてくるのである。それは、瞳を輝かせる純真な子供たちの姿に寄せるいとおしさでもあり、また、私達の次の世代を担い、二十一世紀を切り開いていく彼等に対する熱い期待感でもある。この子供達が、一人の落伍者もなく、立派な社会人として成長してくれることを願わずにはいられない。こんな思いを廻らすと、私は必ず、かつて学生時代に読んだ「米百俵」という戯曲を思い出すのである。いつか、このことについて書いてみようと考えていた。そんな矢先、たまたま愛読している「致知（ちち）」という月刊紙の最近号に、久保田鉄工取締役の廣慶太郎氏が、このことを大変上手に語っておられたので、これを一部拝借し、この作品を紹介したいと思う。

この戯曲は、山本有三が史実に基づいて書き下したもので、維新をかけた戊辰（ぼしん）戦争で、官軍と戦い完膚（かんぷ）無きまでに打ちのめされ、焦土と化した越後の国、長岡藩にその舞台を置いている。この長岡藩の家老職に小林虎三郎という人がいた。虎三郎は、若くして江戸に遊学し、佐久間象山の門下に入り、吉田松陰と並んで「象山門下の二虎」といわれるほどに傑出した人物であった。長岡藩は、禄高を七万四千石から二万四千石に減らされ、当然のごとく藩も窮乏し、藩士やその家族は、かゆさえろくにすすれない悲惨な状態であった。この窮状を見るに見かねて、長岡藩の分藩である三根山藩から米百俵がお見舞いとして届けられた。これを聞いた藩士たちは、この米をどの様に分配してくれるのか心待ちにした。しかし、家老の虎三郎は、この米は分配しない、この百俵の米で学校を建てるといいだした。激昂（げきこう）、抜刀して詰め寄る藩士たちに虎三郎は、「みな百俵、百俵といって騒いでいるが、百俵ばかりの米ではどうにもならないではないか。この米を分けたとしても、一日、二日で食い尽くしてしまうほどの僅（わず）かなものに過ぎない。国の興亡も、藩の盛衰もことごとくこの米にある。自分のことばかり考えていたのでは、長岡はいつになっても立直れない。だから、私は、百俵の米で学校を建て、子供たちを仕立ててゆきたいのだ。」といって、この百俵の米で学校を建て、人材を養成する方が時間はかかるが、長岡藩を建て直す確かな道だとみんなを説得し、極貧の中で学校を建てた。明治三年六月のことであった。

後年、虎三郎の願いが実を結び、長岡から多数のすぐれた政治家、学者、実業家、軍人などが輩出した。

廣氏は、「リーダーの活学」という対談の中で、概（おお）ね以上のように小林虎三郎を語っているのである。この戯曲の主題は、小林虎三郎というすぐれたリーダーが、疲弊のどん底で、安易な道を選ばず、将来を見通し、長岡の再興を人づくりに賭けた決断と命を張って藩士たちを説得するところにある。私は、小林虎三郎に指導者たるべき者の道を思い、また、虎三郎の説得に従った長岡藩士たちの切ないまでの心情に、限りない感動を覚えるのである。

国、地方を問わず政治の要諦は、総てこの「米百俵」の中に凝集されている。私は、子供たちの姿に小林虎三郎の悲壮な決断を思い浮べ、自らの心を戒めるようにしている。